

# 『三人吉三廓初買』研究

藤 本 奈緒子

『三人吉三廓初買』は、白波物作者として有名な河竹黙阿弥の代表作である。吉三と名乗る三人の盗賊が義兄弟の契りを結ぶ。彼らは悪党でありながらも魅力的で、ある種の美しさを持っていた。華々しさ、気風の良さ。それは悪の美と呼ばれるものであった。しかしこの劇の軸に華々しさはない。犬に呪われた家族、多くの血を吸う刀と金。因果に支配された世界は悲劇に彩られている。劇を分解し一つ一つ検証してゆくことで、作品の魅力のありかはどこか、いわゆる悪の美とは何なのか、『三人吉三廓初買』の本質に迫る。

## 一、白波物成立の社会的背景

『三人吉三廓初買』には幕末期特有の社会状況が映し出されている。『三人吉三』が初演されたのは万延元年（一八六〇）正月。その年三月、大老井伊直弼は桜田門外で水戸浪士らに殺害され、閏

三月には五品江戸廻し令が幕府から公布されている。万延元年以前十年に注目しても、嘉永六年（一八五三）にはアメリカ使節ペリーが来航、翌安政元年には日米和親条約締結。安政五年（一八五八）には米英露仏蘭五カ国と修好通商条約を結び、三港が開港。その後十年を待たずして大政奉還が上表、王政復古の大号令により江戸幕府は終焉を迎えている。先行きの見えない情勢は民衆に不安を投げかけた。弱体化する幕府に対し、勢力を強めてゆく朝廷、外国、志士たち。一つの社会に幾つもの力が雑居し、不変と思われた秩序や価値観は揺らぎ始める。『三人吉三廓初買』が生れたのはそうした状況下であった。幕末期には複数の勢力が乱立し、いよいよ混乱を極めていくのである。

社会的混乱の中で、民衆もまた権力の動向に厳しい批判の目を向けていた。宮地正人氏「摺物に見る幕末期民衆の政治風刺」<sup>注1</sup>、吉原健一郎氏「江戸の情報屋」<sup>注2</sup>によると、当時情報提供には圧迫が

加えられたため、民衆の政治批判の形態として錦絵が流布していた。政治批判を裏に含む「判じ物」は内容しだいで版木没収、版元が捕らえられ絶版などの制裁が加えられたが、錦絵は弾圧と出版を繰り返しながら広まってゆくのである。民衆たちは狂歌、川柳の中にも憤懣をぶつけ、やがて為政者階級である武士に対する侮蔑意識が広がってゆく。布川清司氏『近世町人思想史研究』<sup>注3</sup>によると、江戸の外神田、旅籠町の古本屋、藤岡屋由蔵による「藤岡屋日記」の中にも江戸町人の武士に対する侮蔑意識の表れと見られる行動が数多く残されている。たとえば安政五年（一八五八）十一月には江戸日本橋で、白昼罪人五・六人が侍から大小・衣類をはぎとっているし、文久二年（一八六二）五月には一人の大工が二人の侍を打ち負かした例もある。武士を恐れず、むしろ理不尽な行動には対抗心を燃やす不服従の精神は、武士への反抗を禁忌とせず、身分秩序の崩壊を促すことになるのである。

幕末のもう一つの勢力が博徒連中である。高橋敏氏「幕末文化のヒーローとなったアウトローたち」<sup>注4</sup>によると、その武力は時に驚異的であり、民衆もまた彼らに同情的・協力的であったようである。博徒連中が民衆の支持を得はじめた背景には「水滸伝」の存在があった。中国元代に編まれたといわれる『忠義水滸伝』は享保十三年（一七二八）岡島冠山によって翻訳されている。安永

二年（一七七三）には翻案物『本朝水滸伝』が建部綾足によって生まれ、山東京伝、曲亭馬琴が次々に著し、幅広い読者を得た。十九世紀には歌川国芳の浮世絵が大当たりを取り、錦絵・歌舞伎・講釈等に至るまで「水滸伝」ブームに沸いた。博徒連中を「水滸伝」の中の人物に見立て、民衆は博徒に親近感を抱くようになり、悪は一般に受け入れられ始めてゆくのである。

悪者が支配者に対し華麗に反旗をひるがえし、正面切って反発するさまは民衆に痛快味・小気味良さを感じさせた。その生き様には恰好よさや美が求められ、歌舞伎においては白浪物が誕生した。こうして発達してゆく悪の美は、独特のジャンルを作り上げ、やがて白波物の傑作を多数生み出してゆくのである。

また幕末期の高揚するエネルギーの象徴として、園芸ブーム、とくに変化朝顔を例にあげることができる。西山松之助氏『花と日本文化』<sup>注5</sup>によると、江戸中期頃から民衆の間に広く愛されるようになった朝顔は、文化・文政期を迎えると前代未聞の珍花・美花・変化花を発達させている。

化政から幕末に発達した朝顔は、色彩豊富に多種化し、葉や花の形をさまざまに奇形化、変形させた。八重咲き、車咲き、牡丹咲き。こうした朝顔の発達の背景には圧縮された社会的エネルギーがあると言えよう。民衆の憤懣は発散することも表現するこ

とも許されず、幕府による抑圧に強制的に押し込められ、閉じた枠のなかで膨張するばかりであった。また社会全体に幕府、朝廷、外国、いくつもの力が噴出し、いずれも正しいはけ口を見出せず  
にいたのである。渦巻くばかりの奔流はやがて秩序や価値観の枠を歪ませ、奇形化してゆく。民衆は歪みを美ととらえた。あるいは美的価値がすでに歪み始めていたのかもしれない。この暴力的ともいえる美は、当時の社会を突き動かしていた力の表れである。安定を失った社会は奇抜さを求め、園芸においては変化朝顔が、歌舞伎においては白波物など悪の中に栄える花が、歪んだ美として幕末期に咲き誇ろうとしたのである。

幕府権力は失墜し、あつけなく鎖国政策は崩壊した。昨日正し  
いとされたことが今日には違う、そうした混沌に社会は浸されて  
いた。吉原健一郎氏『江戸の情報屋』<sup>注6</sup>の報告によると、嘉永四年  
には、そうした状況を象徴する番付が発行されている。

嘉永四年七月には、大蜘蛛鬼夜行絵の番付である「化物  
評判記」が、神田鍛冶町二丁目の太田屋伝吉の版元で発売  
されたが、手入れ取り上げとなった。(中略) なかに百鬼の  
絵が五十あり、この化物は以下のようなはんど物であった。  
「実と見へる虚の化物 忠と見せる不忠の化物 善と見へる  
悪の化もの 儉約と見へる騙奢の化物 金持ちと見へる貧

## 乏人の化物 (中略)」

この化物の群れは、まさに実と虚とが不明確ないし逆転し  
てきている幕末の世相をしめしたものであろう。封建社会の  
倫理・道徳などが音をたてて崩れおちていく状況を活写した  
ものと言うことができる。

幕末の社会において、一方の真実は他方の偽りであった。実は  
虚であり、どちらも真実でどちらも偽りであった。善悪も同じで  
ある。幕府が定めた儒教的善悪がゆらぐ。悪が美しさを見出され  
てゆく。たがの外れた文化は新たな美を創出していく。

民衆が等しく感じていたのは時代の奔流だけであらう。抗いが  
たい力を人々は肌感じていた。彼らにとってそれは逃れようの  
ない運命であり、身を任せるほかないものであった。そうした  
人々の不安もまたエネルギーとして社会の中に蓄積される。二百  
七十年に渡る歴史の中で淀んでいた幕府政治は、維新という河口  
に向かい、最後の輝きを発していたのである。

## 二、『三人吉三郎初買』における因果関係の整理

『三人吉三郎初買』を構成するのは三つの因果関係である。第一  
に庚申丸を巡る因縁、第二に三人吉三の義兄弟の盟約、そして第  
三に土左衛門伝吉一家にまつわる犬の因果。劇中に張り巡らされ

た因果関係を明らかにし、その影響と効力を整理する。

『三人吉三廓初買』初演の万延元年は六十年ぶりの庚申である。同じく『三人吉三』も庚申年に設定され、劇の随所に散りばめられた庚申が重要な鍵を握っている。そもそも庚申信仰とは道教の三尸説に基づいた信仰である。人間の体内には三尸という三匹の悪虫が住んでおり、庚申の日の前夜、その人の罪を天帝に報告して寿命を縮めると言い伝えられていた。日本においては猿を使いとする日吉山王信仰と結びつき、「悪事を見ない、聞かない、報告しない」ことから三猿を庚申信仰のシンボルとするに至った。また庚申の夜生れる子は盗賊になるなどの俗信があり、庚申の年は盗人に縁のある年とされていたのである。和尚吉三、お坊吉三、お嬢吉三は稲瀬川庚申塚で出会い、義兄弟の契りを結ぶ。奇しくもお嬢吉三の手元には焼き刃に三匹の猿が浮かぶ短刀庚申丸があった。この盟約には庚申の力が強く働いているのである。

この儀式はたんに義兄弟となるためだけのものではない。もう一つの重要な誓い、それは悪としての宣誓であった。三人が庚申堂の土器で血を酌み交わした後、和尚吉三は庚申堂にかけてあった絵馬の括り猿を取り外し、三つに分けて二人に渡す。

「譬へにも言ふ手の長い、今年は庚申年に、」「庚申堂の土器で、義を結んだる上からは、」「後の証拠に三匹の、額に付け

たる括り猿、」「三つに分けて一つづつ、」「守りへ入れて別るるとも、」「末は三人つながれて、」「意馬心猿の馬の上、」「浮き世の人の口の端に、」「かくいふ者があつたかと、」「死んだ後まで悪名は、」「庚申の夜の語り種、」「思へばはかねへ、」「身の上ぢやなア。」<sup>注7</sup>

意馬心猿とは煩惱や情欲のために心が乱れて落ちつかないことの例えである。三猿はここで本来の「悪事を見ざる、聞かざる、言わざる」という意味を失い、三猿＝庚申＝盗賊と性質を変化させている。猿は悪心の象徴となり、それを守り袋に持つということとは生涯悪党として生きることを誓ったに等しい。こうして交わされた悪党の契りはその言葉どおり、彼らの最期の時まで効力を発揮することになる。

この場における儀式性は非常に高い。庚申年、庚申塚。血の交換に三人が用いたのは庚申塚の供物の土器。盟約の証に括り猿。更にこの誓いには因果を導く庚申丸が介在する。時と場、道具と証、そして因果の素がそろった義兄弟の儀式は極めて完成されたものと言えよう。また一つの括り猿を三人で分け合うという行為は、その後の運命も三人で共有するという、呪術的な意味をも持つのである。その後吉三たちは幾度も悪の道を脱しようとするが、ついにその宿命から逃れることはできなかった。庚申塚の悪の契

りは彼らの悔いを認めず、悪として生きること強要するのである。大詰、捕手に追われた三人は「天道さまがお許しなされず」縄目の恥を受けて死ぬのも、また前世からの約束と、「死なばもろとも死出三途」を決意する。三人吉三は三つ巴に刺し違い、ここに庚申塚での誓いは完成する。三人吉三に定められた末路は、三人揃って、悪党としての死なのであった。

また『三人吉三』の中心となり、因果応報を最も凄惨に実現してゆくのが伝吉一家をめぐる犬の因果である。その発端は十年前。海老名軍蔵の命により安森源次兵衛屋敷へ忍び込んだ伝吉は、庚申丸を盗み出し、塀を乗り越えるその時に吠えついた犬を庚申丸で斬り殺す。犬は孕んだ雌犬であった。ちょうど同じ頃伝吉の女房も妊娠しており、やがて生れた子供には犬の斑のような痣があった。このとき伝吉は初めて犬の報いを知る。伝吉が事の仔細を話すと女房は逆上し、赤子を抱えて川へ飛び込み非業の最期を遂げてしまう。犬の呪いに恐れをなした伝吉は心を入れ替え堅気となるが、因果は十年の歳月を越え、執拗に伝吉を追いつけるのである。

伝吉には赤子の他に三人の子どもがあった。和尚吉三、おとせ、そして十三郎。十九年前に生れたおとせと十三郎は双子であった。当時双子は畜生腹と称し、特に男女の双子は夫婦子と言われ、兄

妹姦を犯す可能性が大きいと考えられていた。伝吉は生れたばかりの十三郎を捨て、兄妹は互いを知ることなく成長する。しかし十九年後の庚申年、二人は夜鷹と客として出会い、一目で慕い合うのである。近親相姦は畜生道。一人の恋は犬の報いであった。伝吉は兄妹が畜生道に落ちたことを知るが、どうすることもできぬまま、やがてお坊に殺される。実はお坊は安森家の倅。奇しくも庚申丸の敵を討たれた形となった。おとせと十三郎もお坊とお嬢の身代わりとして兄・和尚に殺される。その和尚もお坊・お嬢と三つ巴の死を迎え、伝吉一家は死に絶えるのである。

ここで注目すべきは、犬の報いが伝吉本人に返ることは一度も無く、必ず伝吉の子に現れるということである。それは伝吉が殺した犬が孕んだ雌犬だったからに他ならない。伝吉は母犬のみならず腹にいた子犬の命をも奪っているものであり、母犬の恨みの強さはこの失われた子犬によるものである。母犬の子への執着は因果を織り成す形となって、伝吉の子に発現する。あるいはそれは、伝吉の子たちに、生れるはずだった子犬が重なり降りたと言えるかもしれない。母犬は伝吉の子を借りて、自分の子を産みなおしているのではないだろうか。

それでは和尚はどのように因果に関わっているのか。赤子、おとせ、十三郎、犬となった伝吉の子には必ず「若く」「無残な」

死が待っていた。それは生れる前に殺された子犬の祟りである。そしてここで、和尚はおとせと十三郎に「無残な」死を与える執行者としての役割を負っているのである。母犬を伝吉が殺したように、犬となった伝吉の子どもを殺すのもまた、伝吉の血縁者なのである。伝吉の子を借り死んだ子犬が蘇り、その子を伝吉の家族が再び殺す。因果によって殺戮は繰り返され、やがて家族殺しの執行者も命を落す。因果は伝吉の血縁者だけを執拗に追い、恐るべき周到さで完結させるのである。

因果の顕著さは登場人物の死を比較することによっても明らかとなる。『三人吉三』では多くの人物が作中で死に至るが、因果を抱えた者の死は際だって奇妙な特徴を持つのである。伝吉一家の家族殺しは犬の因果によるものであり、三人吉三は猿の結びつきにより三つ巴の死を迎えている。

今ひとつ注目すべきは庚申丸に関わる人物の死である。安森源次兵衛は庚申丸盗難の責により切腹。庚申丸を盗んだのは伝吉、命令したのは海老名軍蔵であった。その軍蔵は安森家の若党弥作に殺される。しかしこの殺害は庚申丸盗難の恨みによるものではない。弥作は盗難の真相を知らず、結果的に敵討を果たしているのである。一方伝吉は安森家の倅お坊吉三と百両を争い、互いの素性を知ることさえなく、お坊に斬り殺されている。庚申丸盗難

に関わった者は必ず安森家の手によって命を落とす。この本人の意思をも越えた無作為な仇討ちには、紛れもなく庚申丸の力が働いていると言えよう。伝吉によって失われた庚申丸が再び世に現れたのは十年後、六十年に一度の庚申年。庚申丸はその年を選んで姿を現し、三人吉三に悪党の盟約を為させ、伝吉の十年に及ぶ犬の因果を完結させる。庚申丸には人智を超えた力があり、その力が、彼らに仇討ちを果たさせたのである。安森源次兵衛、弥作——海老名軍蔵、お坊吉三——土左衛門伝吉、彼らの死は庚申丸と美しい直線によって結ばれている。

各々の因果の特徴は個々の死にも反映し、それは各因果が高度に完成していることを示している。更に三つの因果が和尚や伝吉を介し僅かずつ交錯しあうことで、その網はますます複雑なものとなる。因果は登場人物の死をも操り、本人の知るところ、また知らぬところで運命を動かしているのである。

一方で、『三人吉三』では全く別の話も同時に進行している。梅暮里谷峨の洒落本『傾城買二筋道』を基とし、吉原の丁字屋を舞台に繰り広げられる文里と一重の恋愛譚がそれである。以下今尾哲也氏に習って伝吉一家にまつわる話を「注8 俠客伝吉因果譚」、文里と一重の物語を「通客文里恩愛斬」と称することにする。

丁字屋の一重は没落した安森家の娘、お坊の妹であった。片や

文里は海老名軍蔵と庚申丸を売り買いした相手、十三郎の主人である。一重は文里の人情にほだされ心通わせるようになる。純粹な男女の恋愛。それは因果の色濃い『三人吉三』において異色なものであった。文里と一重が人間の愛の交歓であるなら、おとせと十三郎の愛は犬のそれであろう。文里、一重の愛が正常であるほどおとせと十三郎の営みは醜悪なものとなり、二人が犬の報いを発現するほど、文里と一重の愛は清らかなものに高められてゆくのである。

何より大きな相違は子どもの誕生である。伝吉の子は死に絶える運命にあった。しかし一重は文里の子、梅吉を出産する。「俠客伝吉因果譚」には何かを生み出す力はなかったが、「通客文里恩愛嘶」には瑞々しい命、生命の息吹があったのである。「俠客伝吉因果譚」が死の物語ならば「通客文里恩愛嘶」は生の物語であると言いうことができよう。この梅吉の誕生こそ「通客文里恩愛嘶」における最も重要な出来事なのである。

対照的なのは生命の有無だけではない。『三人吉三』では夫婦、親子、兄弟と幾つもの新しい人間関係が生まれている。「俠客伝吉因果譚」ではおとせと十三郎が夫婦となり、三人吉三が義兄弟となる。しかしそれらは死へ向かう関係であった。一方「通客文里恩愛嘶」で文里と一重は梅吉を生む。梅吉を出産した後、一重は

産後の肥立ちが悪くそのまま病死してしまう。しかし最期に及んで一重は梅吉を抱き、「コレ、梅、私やお前の親ではないぞえ。お前の親は、おしづさまちやぞ。」と言いきかせるのである。梅吉に乳を与えていたのは文里の妻おしづであった。一重は死に血の繋がりは途切れるが、おしづと梅吉は乳を介してすでに母子となっていた。文里と梅吉、おしづ、それは生命を育む関係なのである。

梅暮里谷峨の『傾城買二筋道』及び後篇『廓の癖』、三篇『宵の程』では一重は文里の子を五ヶ月で流産し、養生の末一重は回復する。黙阿弥はこの生死を逆転させた。「通客文里恩愛嘶」が必要としたのは新しい命、生へと繋がる人間関係であった。死に彩られた世界の中で、ここにだけ生命力がある。母子の絆はより強調され、「俠客伝吉因果譚」における母犬の呪いは更に陰惨なものとなる。強い光が濃い影を生み、そのコントラストが『三人吉三』の因果世界を際立たせるのである。

### 三、『八百屋お七』と劇世界の多重構造

『三人吉三廓初買』には二つの世界が組み込まれている。お七と寺小姓吉三郎の恋愛譚「八百屋お七」、もう一つは梅暮里谷峨の洒落本『傾城買二筋道』を基とする「通客文里恩愛嘶」。複数の世界が共存しうるのは黙阿弥の巧みな手法によるものであった。更に

「侠客伝吉因果譚」が第三の世界として確立し、重厚な劇世界を生み出してゆく。『三人吉三』における劇構造を探る。

八百屋の娘お七が火刑に処されたのは天和三年（一六八三）三月のこととされている。貞享三年（一六八六）井原西鶴が『好色五人女』を書いて以降、「八百屋お七」は様々な趣向や登場人物を生み出し、しだいに大きな世界観を形成していく。ここでは歌舞伎のお七物が作り上げた独自の世界を「八百屋お七」の世界とし、『三人吉三』までの変遷をたどる。

今尾哲也氏「解説 黙阿弥のドラマトゥルギー」<sup>注9</sup>によると、歌舞伎においてはお七と吉三郎の悪への転身という特筆すべき変化が見られるという。文化六年（一八〇九）三月、中村座で演じられた『八百屋お七物語』において、最初に吉三郎に悪の装いがなされている。その十二年後、文政四年（一八二一）には四世鶴屋南北が、『敵討櫓太鼓』で吉三郎を悪党として描く。屋敷を追放された尾花吉三郎は諸国を流浪するうち八丈小僧吉三と名乗る悪党となり、お七を騙すが、その後出家して吉三道心となった。伝統的な優男は崩壊し、色悪としての吉三、そして吉三道心と、吉三郎は新たな姿を得てゆくのである。

そしてその世界は黙阿弥によってついに解体される。黙阿弥は『三人吉三』にお七と吉三郎の名を残しながら、本人を表面から消

してしまった。二人の恋は劇から退き、すでに八丈小僧吉三郎と吉三道心とに分解されつつあった吉三郎は、お坊吉三和尚吉三にそれぞれ独立するのである。しかしここで注目すべきは、和尚吉三もまた所化あがりの悪党であるということである。和尚を悪たらしめているもの、それこそが和尚の中の吉三郎であろう。『三人吉三』において吉三郎は悪の代名詞、悪を引き寄せる要素へと完全に変質しているのである。それはお嬢にとつても同じである。「八百屋お七の名を仮」りたお嬢は、また吉三郎の名も仮りている。お嬢の中の吉三郎はお嬢が男である根拠を生み、お七を悪へと引き寄せる。こうして清廉な寺小姓吉三郎が失われ、吉三郎に恋をする一途な娘お七が姿を消した「八百屋お七」は、その世界を大きく変貌させるのである。

「八百屋お七」が悲劇的な物語として受け入れられたのは、お七の純粋な恋に同情が寄せられたからであった。しかし『三人吉三』は一途な娘お七もその相手吉三郎も、根本である二人の恋も失っている。男であるお嬢には娘の心情、恋の物語性を引き継ぐことは出来ないのである。恋から切り離された放火は凶悪な犯罪であり、『三人吉三』の「お七」には罪や死、破滅の予感と狂気だけが残された。そしてそれらを一手に引き受けるのがお嬢吉三なのである。おとせとお嬢が稲瀬川端で出会い、お嬢がお七と名乗ると



き。無垢な娘の背に浮かぶのは狂氣的な女である。まだお嬢の正体は分からない、しかし観客は、お七という女が、恋に死んだ狂女であることだけは知っている。お七の名はお嬢の二面性を予感させ、その二面性を黙阿弥はお嬢が盗賊であり、更に男であったという趣向をもって実現する。そしてお七の持つ異常な精神は、女装という衣装の異常性によって補われる。恋を持たないお嬢が「八百屋お七」の世界で発揮するのは、その異常性と残忍性なのであった。

お嬢の効果は世界を「お七」に引き付けることにある。稲瀬川庚申塚の場の後、お嬢は庚申丸を持ったままふつりと姿を消し、再び登場するのは吉祥院に三人吉三が集結する時である。お嬢不在の劇は「侠客伝吉因果譚」、「通客文里恩愛嘶」を展開し、世界は一度「お七」を離れると言えよう。こうして「侠客伝吉因果譚」「通客文里恩愛嘶」を経た後にお嬢が再び登場するとき、お嬢は吉祥院の欄間から現れる。これは文化六年（一八〇九）福森久助作のお七物『其往昔恋江戸染』の趣向を取り入れたものであるが、「お七」として広く認知される趣向を用いることで、お嬢は『三人吉三』を「お七」に引き戻しているのである。欄間から覗くお嬢が声をかけたのはお坊であった。この場のお嬢はお七の色が濃い。それはおとせと十三郎、お嬢とお坊を対比させるための必要な変

身であった。お坊には吉野という情人がいた。しかしお嬢とお坊が揃うと吉野の存在は消え去り、それが稲瀬川端以来の再会であるにもかかわらず、二人はまるで恋人同士のような印象をもたらす。その奇妙な自然さは二人にお七と吉三郎が潜んでいるからに他ならず、そしてこの両立はお坊と吉野が「通客文里恩愛嘶」、お坊とお嬢が「八百屋お七」と、それぞれ別の世界に存在するため成立するものである。吉三郎とお七が揃い、お嬢はいよいよお七らしさを発揮する。劇の本筋から失われた恋を垣間見せることで、お嬢は「お七」を強く印象付け、「お七」から離れていた世界を再び「お七」に引き戻し、狂気と悪と、訪れる死を予感させるのである。

そのお嬢がお七の恋をはっきり表すとすれば、大切お坊と再会し火の見櫓の太鼓を叩く場面であろう。捕手に追われる中、南郷二丁目の木戸越しに手を取り合うお嬢とお坊はまさにお七と吉三郎であった。そこへ入る唄は「逢ひたかつたと木戸越しに、する手さへも震はれて、まだ春寒くぬくめ鳥、放れ片野によそ目には、色とみよりの片翼。」振袖姿のお嬢とお坊はまるで恋人のように見え、お嬢は比翼の片翼のようである、という。お嬢は木戸を開けるために櫓に上って太鼓を叩く。そこへ入る清元「雨は降れ降れ、降れ降れ小雨、ぬれてうれしき屋根の上……」は男女の情

交を思わせ、これに対となる唄「雪は降れ降れ、降れ降れ小雪、積もる話も屋根の内……」がおとせと十三郎を唄っていることから、先の唄がお七と吉三郎をさすのは明らかである。櫓へ上るお嬢にお七の恋を重ねるのは必要不可欠な手段であった。なぜならお七が火をつける、また櫓の太鼓を叩く行動理由こそ、吉三郎への恋心でなければならぬのである。櫓の上のお七は吉三郎に恋をしている。その恋は追いつめられ、理性を失くした愛情であった。お嬢は櫓太鼓を叩くことによって、お七の激しさと狂気を舞台に呼び起こす。『三人吉三』におけるお七の恋は、この太鼓を叩くという行動に凝縮されているのである。

三人が契りを結ぶきっかけとなった百両は和尚、そしてお坊の手へ回った。金は生活や営み、社会の象徴である。その丸い形は人の手から手へ渡るに適し、つながりを生み出してゆく。百両は劇展開の鍵となり「侠客伝吉因果譚」「通客文里恩愛嘶」を巡る。しかし庚申丸はお嬢が手にしたまま姿を消した。刀は血と死の象徴である。その刀をお嬢は持ち歩く。庚申丸の性質はそのままお嬢の性質であった。血と刃物と狂気を請け負い、「お七」の世界に彩る要素がお嬢にはあった。

『三人吉三』は「お七」を根底に二つの話「侠客伝吉因果譚」「通客文里恩愛嘶」が進行する。それらを繋ぐのが双方を行き来する

登場人物であり、和尚とお坊、百両の金であった。

十三郎が紛失した百両は多くの人物を巻き込んでゆくが、中でも「侠客伝吉因果譚」「通客文里恩愛嘶」を仲介する武兵衛は大きな役割を果たしている。大金をかたに武兵衛がお七に結婚を迫るのは「お七」の約束事であるが、お七がいない『三人吉三』において、武兵衛は代わりにおとせに言い寄るのである。武兵衛の行動が「お七」をベースとすることによって、「侠客伝吉因果譚」は「お七」から切り離されない。武兵衛は「侠客伝吉因果譚」に組み込まれた「お七」の楔であるといえよう。また「通客文里恩愛嘶」の中で、武兵衛は百両と引き換えに一重を手に入れようとする。武兵衛は一重に百両の代償として「文里二世」という彫り物を消し、自分の名前を彫るように迫る。これは『傾城買二筋道』で無心された五十両の代償に「文里二世」という彫り物を消し、自分の名前を彫れと迫った権の役回りである。また同時に、葉代二十両の代償に一重を妻に求める医者痛飲も重ね合わせているのである。こうして武兵衛は「通客文里恩愛嘶」を「侠客伝吉因果譚」に結びつけ、『傾城買二筋道』の権と痛飲を演じながら、武兵衛が結婚を迫るという形でもって、「通客文里恩愛嘶」を「お七」にも繋いでいるのである。

もう一つの重要な配置が和尚とお坊の二人である。三人吉三が

揃ったときに生れるのは「お七」の悪の世界であつた。しかしその後別れ別れになると、和尚は「俠客伝吉因果譚」に、お坊は「通客文里恩愛嘶」に組み込まれ、三人の性格は違つた色合いを強めるのである。和尚は犬の因果に捕らわれた家族として、常に「俠客伝吉因果譚」の中で行動する。一方お坊は一重の兄として「通客文里恩愛嘶」を傍観する位置に収まつた。丁字屋でのお坊は安森家の放蕩息子であり、安森源次兵衛の息子としての性格を強くする。こうしてお坊が潜むことで「通客文里恩愛嘶」は『三人吉三』から離れず、お坊が伝吉を斬り殺す場面に至り、「通客文里恩愛嘶」と「俠客伝吉因果譚」は一瞬の結びつきを持ち、更に安森家―伝吉―海老名軍蔵の庚申丸を巡る因縁は終結をみせるのである。

三人吉三がそれぞれの世界に身を投じ、再度集結することによつて複数の世界は結び付く。吉祥院では「八百屋お七」、「俠客伝吉因果譚」がめまぐるしく入れ替わる。複数の世界は時に重なり、奥行きを広げ、複雑で広大な劇世界をもたらしている。この多重構成が『三人吉三』の魅力の一つなのである。

#### 四、『三人吉三』における因果観と善と悪

稲瀬川庚申塚で三人吉三は義兄弟の契りを結び、変わらぬ絆を約束する。しかしこのとき三人の口から発せられたのは「末は三人つながれて」、「意馬心猿の馬の上」、「死んだ後まで悪名は」、「庚申の夜の語り種」といずれも死の有り様であつた。「思へばはかねへ」、「身の上ぢやなア。」と三人は嘆息する。彼らは運命に支配された自分について自覚的であつた。吉三たちは己の末路として死を想定し、それを信じていたのである。悪党である吉三たちにとって、人生とは「はかない身の上」なのであつた。そして彼らが「はかない」運命を受け入れた以上、吉三たちの人生の主題は、その「はかない身の上」をいかに生きるか、ということにあつたと言えよう。この「はかない身の上」と奮闘する姿こそ『三人吉三』の描くところなのである。

『三人吉三』において因果に対する共通の対応は諦めである。彼らは何故それほどまでに運命に従順なのだろうか。それは彼らが悪党であるからに他ならない。吉三たちにとって因果の因は常に自らの犯した悪行であり、彼らを襲う運命は、彼ら自身に起因しているのである。吉三たちは悪党としての己を自認していた。因果の種となりうる悪がある。報いが返ってもおかしくない。こう

なると自覚があるだけに、普通の人間よりも因果に弱い。思い当たる節がある彼らは実に謙虚であり、罪を重ねれば重ねるほど、従順ならざるをえなかったのである。その従順さは時に驚くほどである。和尚は、おとせと十三郎が因果によって死ぬ運命にあるならばと、お坊とお嬢の身代わりに二人を殺してしまうのだ。和尚は弟・妹の首を見て泣く。しかしそれは罪悪感にさいなまれてのことではない。畜生道に落ちたときから二人はこうなる運命だったと、哀れな因果を嘆いているのである。殺人は因果であつて、それゆえ和尚に弟妹を殺した葛藤はない。それは伝吉を殺したのがお坊と知れたときも同じである。伝吉の死が因果の業である以上、お坊に罪はないことになる。和尚が哀れむのは死ではなく、恨むのは犯人ではない。それらは全て因果である。彼らは因果の存在を信じ、その理を肯定しているのである。

それは吉三たちに限ったことではない。和尚の父、土左衛門伝吉。彼は自分の家族を縛る犬の因果を誰よりもよく知り、それを恐れていたのである。久兵衛が十三郎の捨てられていた状況を語ると、伝吉は十三郎こそ捨てた双子の片割れであると知る。すると伝吉は「卜、これを聞き、ぎつくり思入あつて、おとせ、十三郎を見て、愁ひの思入。」と沈痛な表情を浮かべる。しかし彼は何とも言わない。双子の兄妹が畜生道に落ちたことを知っても決して

取り乱さない。ただ不憫な、と悲しく二人を見やる。伝吉が十三郎を捨てたのは兄妹姦を慮つてのことであつた。しかし結果的に、それが二人を男女として出会わせることになる。伝吉の努力は畜生道を実現するための準備となつていたのである。彼は己の無力さと因果の逃れがたさを思い知つたに違いない。伝吉は二人の恋を阻もうとはしない。それどころか二人に同衾を勧めている。おとせと十三郎のためを思うなら、たとえ二人が悲しもうと二人を引き離し、これ以上の畜生道を犯させないようすべきだったかもしれない。しかし伝吉にはそれができないのである。伝吉にもまた悪党としての自覚があつた。双子の兄妹姦は伝吉が殺した犬の報いであり、因果は伝吉にとっては罪と罰でもあつたのである。因果の力の強さはすなわち自分の罪の重さである。それをよく知る伝吉は、その報いを目にした以上、因果を受け入れ、行方の知れぬ運命に二人を任せるほかないのである。

しかし、そんな登場人物たちも理不尽な運命にいつも無抵抗なわけではなかった。伝吉は幼いおとせと十三郎を引き離す、それは兄妹の近親相姦という定めに抗つてのことではないだろうか。犬の報いを知ればひたすら善行に勤め、以前の悪事を清算しようとする。伝吉は決して全てを投げ出したわけではなく、少しでも因果応報を回避しようと努力を重ねているのである。それは和尚

も同じである。伝吉の独白から因果応報の恐ろしさを知ると、彼は悪心発起する。また伝吉が百両という大金に苦しんでいることを聞けば、信心を捨て悪に戻った。義兄弟を救うために実の弟妹を手を掛けた。お嬢もお坊も堅気に戻ることを誓い合った。運命に左右されながら、伝吉や吉三たちは諦めと努力を幾度となく繰り返す。時に絶望し、打ちひしがれる。それでも状況を打開しようとはがく。未来を知るすべを持たない彼らは今を生きねばならず、その時々以最善と思うことを為す以外にないのである。

吉三たちの抵抗は因果の中では微力である。彼らの努力が無駄となり更なる不幸を招いたとき、悲しい諦観はいつそう色濃く浮かびあがる。劇を彩るのはこの悲しみであった。運命に裏切られ、嘆きながら、それでも吉三たちは全てを諦めることはできない。はかない努力と知つても彼らはせずにはいられないのだ。この運命に翻弄されながらも必死に抗う姿こそ、『三人吉三』に描かれる、人間の生のありようであろう。彼らの輝きは彼らに溢れる生きる力である。そこに彼らのたくましさがあり、この活力が悪に美を与えているのである。

そうした彼らの生きる姿勢は悪としてのあり方にも表れている。悪の輝きは彼ら自身の輝きであり、畢竟人間の輝きであった。『三人吉三』において善と悪はどのように描かれているのか。「悪役」

「敵役」というような全くの悪として存在したのは海老名軍蔵であつたろう。しかし彼は物語が始まると早々に殺されてしまう。悪そのものを具現化したような悪人は『三人吉三』の描くところではないのである。吉三たちは義理堅く、時に改心し、他の人の役に立とうとする。豊かな人間性が彼らにはあり、吉三たちは善も等しく持ち合わせているのである。庚申塚で、三人吉三は悪党としての己を「思へばはかない」、「身の上ぢやなア。」と嘆く。彼らは悪は罪であり、必ず罰せられると信じていた。悪としての己を完全に肯定しているわけではないのである。しかし盗賊である吉三たちは善人とは言えない。とはいえ全くの悪人でもない。彼らの善と悪は表裏一体であつた。いや表と裏ほどはつきりもせず、善と悪はあいまいなまま並行線となっていた。彼らはその狭間で時に善に寄り、また悪に寄り、たえずたゆたっているのである。

彼らの善悪はその時々状況により比重を変えて現れる。例えば和尚は真剣をつき合わせるお嬢とお坊の間に飛び込み、自分の腕を差し出して争いを諫める。それは悪党ならではの自己犠牲であつた。和尚の采配に感じ入った二人はその場で義兄弟の契りを結び、百両の金を和尚に差し出す。和尚は譲り受けた百両を、親孝行でもしようかと父親のもとに持ってゆく。悪の中でも善をする。それが悪を単なる悪にとどめず、義理や人情、気風のよさな

どの色あいを与え、魅力的な悪、悪の美学といったものを生み出すのである。彼らは常に二つの顔をのぞかせた。多面性を持つ吉三たちは、いかにも人間らしいといえるだろう。

『三人吉三』の魅力の一つは入れ替わる善悪である。その変化と心情はいかにもドラマティックであり、一人の人間が善悪両面を見せることで、人間の持つ多面性と、善と悪の差異を明らかにするのである。この善悪の振幅が最も大きいのは伝吉であろう。伝吉は「かつて悪人だった善人」であり、また「善行を積む悪人」である。妻子の死以降、仏のごとく善行を積んでいた彼は最後の最後で大悪党へと返り咲く。伝吉は百両を譲ってくれと手を合わせ、お坊にすがり付く。しかしお坊にののしられると、次の瞬間数珠を引きちぎり、憎々しい悪党へと豹変するのである。初老の善人から言葉やしぐさ、はては人格まで変わったような伝吉の激しい転身は、並行する善悪を歴然とさせた。それほど性質の異なるものを伝吉は持たされているのである。稲瀬川でおとせと出会ったお嬢が初々しい娘から盗賊へ鮮やかに変身したように、大悪党へと豹変した伝吉は、ここで悪の美を発揮する。それは悪の輝きであり、善悪二つの顔をあわせ持つ、人としての輝きなのである。

そうした彼らが悪の道へと落ちたのは、ひとえに彼らの環境ゆ

えに違いない。庚申丸盗難の咎によりお坊の実家は没落し、またお嬢は五つでかどわかされた。育ち、境遇、そして何より彼らを縛る因果である。『三人吉三』の劇世界において、因果は最も支配的な力であった。例えば悪心発起した和尚のもとへ伝吉が金に困っていることが知られる。その金額は真つ当に働いては到底工面できない額であった。再び悪事に手を染めることは和尚の本意ではなかった、しかし和尚は父親の助けをしたかったのである。因果の強い運命は彼を否応なく悪へと引き寄せる。その心が善であるにもかかわらず、彼は悪へと傾かざるを得ないのである。「アア、生れ付いた宿業か。」和尚は嘆く。「せつかく仏の姿になつたのに、金ゆゑ鬼にならにやアならねへ。」和尚だけではない。お坊もまた妹一重や文里の助けをしたいと願った。しかし、そうしたお坊のとつた行動は武兵衛を襲つての追いはぎなのであった。お坊には他に手段がなかったのである。改心したはずの伝吉もまた悪党としてお坊を襲い、お坊はついに伝吉を殺す。因果は否応なく吉三たちを悪へ走らせる。彼らがいくら善を望んでも、因果が、そして彼らを囲む社会がそれを許してはくれないのである。吉三たちには人間らしく生きることが難しかった。彼らは与えられた状況の中でしか生きてゆくことができず、その中で精一杯生きようとする、どうしても悪へと押し流されてしまうのだ。悪

に身を置かざるを得ないその運命を、吉三たちは「はかない身の上」と嘆く。その葛藤と絶望が、彼らの悪に悲しみを与えているのである。

やがて因果は善悪をも混乱させる。吉祥院の場に至って、和尚は捕手に追われるお坊とお嬢を救うために、身代わりとしておとせと十三郎を殺してしまう。命を救う、奪うという善悪和尚は同時に行うのである。それは因果による秩序の崩壊と言えよう。善人悪人というならば、盗賊であるお嬢とお坊は悪人であり、おとせと十三郎は善人だったかもしれない。しかし双子の弟妹は畜生道に落ちており、和尚にとっては義理の兄弟を敵と狙う存在でもある。善は同時に悪であり、どちらも善で悪であった。因果によって善悪の基準は瓦解し、もはや善も悪も存在しない。あるのはただ善悪を超えて働く運命だけなのである。

しかしその混沌とした世界の中で、彼らは自分なりの生き方を模索する。例えば義兄弟の契りを結ぶ、これも彼らなりの努力なのである。因果に悪の道を強いられるなら、吉三たちは悪の中に己の指針を築こうとする。たとえその身を「はかない身の上」と感じようと、次の瞬間には「サア、長居は恐れ。」と立ち直る。「まづ初春から力ができ、」「祝いにこれから、」「三人一座で、」「義を結ばうか。」と力強く見得を切る。そこに彼らの生命のきらめきが

ある。彼らは常に前向きであった。彼らは自分に与えられた運命を生きなければならず、いつまでも嘆いているわけにはいかないのだ。幾度となく運命に絶望し、打ちひしがれようと、またそこからできることを探し出す。時に改心し、親子兄弟を助ける。再び悪に手を染める。彼らはいつも生きること必死である。その繰り返しの中で、吉三たちは善と悪の間を行き来するのである。

そしてその生きようとする生命の輝きこそ、人間のもつ輝きなのであった。『三人吉三』にきらめくのは、彼らの悲しくもたくましい命の光なのである。時に華麗に、時に嘆きを伴って輝く光は、因果に絡め取られた暗い世界にあつてひととき眩しく照り渡った。そしてそれが吉三たちの悪の中に灯るとき、悪は独特の妖しい美しさを発揮するのである。『三人吉三』における悪の美とはすなわち、悪の中に輝いた生の美であつたと言ふことができよう。

悪に生きなければならぬならば悪の中で、彼らは己のけじめをつける。百両のために悪へと戻ることを決意する和尚は「つづまるところはまた元の、悪に返つて一と働き、親の難儀を救つた上、我と我が身の罪科を、名乗つて刑罪受けるが言ひ訳。」と、自首して罰を受ける覚悟であつた。お嬢もお坊も、百両の強奪と伝吉殺害の真相を知ってからは「親仁を殺した言ひ訳に、」「死なにやア義理が済まぬわへ。」と死を賭して詫びようとする。それが悪

党としての、彼らなりのけじめなのだ。たとえ因果に操られた結果であろうと、自分の行動の責任は自分で負う。それが唯一彼らにできる、運命への抵抗だったのかもしれない。ついに最期を迎える三人は「もはや思ひおく事なし。」「これまで尽くせし悪事の言ひ訳。」「我と我が手に、」「身の成敗。」と自らの手で自らの悪事の片をつける。悪を強いた運命に対する諦めもあろう。しかしそれ以上に、彼らはいつも自分の住まう世界で一生懸命であった。吉三たちは自分の意思でその結末を選びとる。この死に悲哀だけではない華々しさがあるのはそのためなのである。

彼らの努力はいつも運命に裏切られる。吉三たちが積み上げてゆく小さな努力を、因果の波が押し流す。打ちひしがれ、嘆きながら、彼らはまた一つ一つ積み上げてゆく。善悪二つの岸にはさまれた川、その渦に巻き込まれながら、混濁した善悪の中にも、吉三たちは必死に己の足場を築こうとしていたのである。

## おわりに

悪の美、痛快さ。それ以上にこの物語に溢れるのは運命に翻弄される人々の嘆きである。『三人吉三廓初買』を支配する因果の力は、当時の民衆にとっては幕末の社会の奔流であった。吉三たちが因果を上位の理と感じたように、民衆もまた抗うことのできな

い時代の力を感じていたのである。その中で吉三たちは自分なりの生き方を模索する。そうした飽くなき努力を、黙阿弥は美しいものとして映し出しているのである。

しかし『三人吉三』の魅力は悪への共感だけではない。何より強烈な印象を与える登場人物たちの輝きが、人々の心をひきつけて離さないものである。善悪のグラデーションは彼らの性格をいっそう豊かなものにし、より人間味を帯びた彼らは生き生きと行動した。彼らの輝きは生きようとする力である。それは命の輝きである。『三人吉三廓初買』において悪の美とはすなわち、悪の中に落とされた生の輝き、生の美、たくましく生きる人々の輝きだったのである。

『三人吉三廓初買』の魅力は多角的な多重構造である。犬、庚申丸、義兄弟。複数の因果は多くの人間を巻き込みながら、やがて複雑に絡み合う。善悪は交錯し、乱反射する。そして折り重なる『侠客伝吉因果譚』『通客文里恩愛嘶』『八百屋お七』。暗い影を投げかける幕末の社会を作品に反映しながら、『三人吉三』は鮮やかな輝きを発した。因果の闇、悲しい諦めを背景に、その光はいっそう強さを増す。黙阿弥は驚嘆すべき構成力でもってその作品を完成させた。そこには因果に対する深い理解と、人間の本質へのするどい洞察力がある。まさに黙阿弥の最高傑作と言って良い。



# 注

注1 宮地正人氏「摺物に見る幕末期民衆の政治風刺」『幕末学のみかた』

(朝日新聞 一九八九年)

注2 吉原健一郎氏『江戸の情報屋』(日本放送出版協会 一九七八年)

注3 布川清司氏『近世町人思想史研究』(吉川弘文館 一九八三年)

注4 高橋敏氏「幕末文化のヒーローとなったアウトローたち」『幕末学のみかた』(朝日新聞 一九八九年)

みかた』(朝日新聞 一九八九年)

注5 西山松之助氏『花と日本文化』(吉川弘文館 一九八五年)

注6 注2に同じ。

注7 本文の引用は全て『新潮日本古典集成 三人吉三廓初買』に拠った。

注8 今尾哲也氏「解説 黙阿弥のドラマトゥルギー」『新潮日本古典集成 三人吉三廓初買』

三人吉三廓初買』

注9 注8に同じ。

(ふじもと なおこ 二〇〇五年日文卒)